

あゆみ通信

VOL. 118

 あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会 長 浪花 博
広 報 本持 喜康


同朋会運動は昭和37(1962)年以来、50年間脈々と流れる宗門のいのちであると思っています。

これは単に宗門の願いにとどまらず、人間の歴史の底に流れる人間回復の願いです。それが聞法会運動という形を持って現れ、我々の世界に開顕された運動です。だから今日、それが行き詰まっているとか、様々な問題があるかも知れませんが、願いそのものが行き詰まっているわけではありません。

ではどこに問題があるかと言えば、我々が本当に「聞く」という、その一点を疎かにし、いわゆる「聞不具足」になっているからではないでしょうか。同朋会に関わる私が、本当に本願を聞く身になれているかどうか。聞いているつもり、信じているつもりと言うところに留まってしまっているのではないのでしょうか。聞法をし領かれることもあるでしょうが、その体験に座り込んでしまっているという問題です。今の同朋会運動は、懈怠界へ落ち込んでいると感じます。そもそも、同朋会運動は、人間がやっている運動ではなく、法を聞かせずにはおかぬという、人類の歴史の底を貫いて促している本願にあります。同朋会運動という形となって生み出されてきた

原動力は本願にあるのです。ですからもう一度一人ひとりが、本当に「聞く」と言う座に立ち帰らねばならないのでしょうか。

(藤井善隆「願いに生きた人々～同朋会運動の深層を訪ね」難波別院発行から引用)

朋友会と 合同研修会開催



2018年9月27日(木) 午後1時30分から、阿倍野区の即應寺(藤井真隆住職)をお借りして朋友会との合同研修会が開催された。朋友会は第2組の次代を担う青年僧の組織である。会の目的は第2組寺院の聞法の道場としての興隆を、青年寺族と門徒・推進員が手を携えて、聞法会を共にしながら、取り組んでいこうとしているもの。今回で4回目となる。特に今回はあゆみの会と門徒有志を加えた16名と朋友会から7名が参加した。また組外からのご参加もいただいた。事務局の進行で開会、真宗宗歌斉唱して、開会挨拶は朋友会の友澤秀三会長(南照寺)からあり、引き続いて講師は宗恩寺の池田英二郎先生で、「御念仏をいただくとは」を

講題にお話いただいた。休憩をはさんで、友澤会長の進行で座談を行い、講話の感想や中身について色々な意見をいただき、最後にあゆみの会浪花博会長から、第2組の寺院の興隆に向けて共に力を合わせて取り組むためにこの会を続けていきたい旨の閉会の挨拶をいただいて、恩徳讃を斉唱して閉会となった。

総会は12/16 (日) 午後1時30分から行圓寺 (西成区)

記念すべき10回の総会です。たくさんの会員の皆様のご参加をお待ちします。今から予定してください。詳細は別途。

継続はちから？

2008年に、第2組第2期養成講座修了者有志を中心に準備会として発足した「あゆみの会」が、翌年に1期の有志も交えて正式発足してから、3期、4期の仲間を加えて活動すること、今年で10年。歴代の組長・副組長を始め、手取り足取りご指導をいただいた即應寺の藤井善隆住職を始め、新田修巳先生やこれまでご縁の皆さんとあゆみの仲間が居て、まがりなりにもここまで来られたのだと感謝している。でも、浪花会長が口癖のように言われる、推進員として自坊の興隆にどれだけお手伝いできたかと考えると、まだまだの気がする。初心不忘。10年目の今年。イチから改めて、あゆみなおしたい。(本)

一期は夢 一会はうつつ 旅はじめ 石寒太

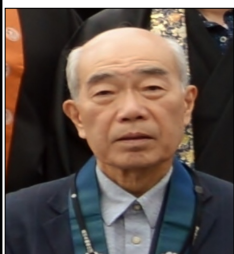
第2組聞法会報告



2018年9月12日(水) 午後2時から、天王寺区の紹隆寺(喜左上恵子住職)をお借りして第2組聞法会「共に学ぶ『正信偈』」が開催され、組内の住職・寺族と門徒、推進員など、31名が参加した。講師は4組正業寺の新田修巳先生で、今回は「遊煩惱林現神通 入生死蘭示応化」を学びました。先生は俳人石寒太氏の俳句や蒔田さくら子さんの短歌や、芭蕉の俳句などを紹介しながら説明をされ、「信心の人は無数の懐かしい聞法の朋友を恵まれるのです」と、締めくくられた。

新田修巳先生の法話をお聞きして

細川 克彦 (佛足寺)



今回、先生は「正信偈」の「遊煩惱林現神通 入生死蘭示応化」についてお話いただいた。「遊」とは、自由自在に楽しくおこなわれる意で、「神通」は不思議な、心と心が通い合って生活の中で教化が自然に行われていく意であると。

先生は石寒太氏の「一期は

夢 一会はうつつ 旅はじめ」という俳句を引かれ、一生は夢のように儚いからと、なかなか元気も出ないかもしれないが、しかし、無量寿のいのちに目覚め、無量寿のいのちへの旅の第1歩を踏み出そうとする時、そこに無限に広がっていく晴れやかな楽しい歩み(往生)が始まる。



また、「応」とは、人が教化のために現れてくださる意で、「化」とは、地獄、餓鬼、畜生とか、浅ましい世界を見せてくださるご縁の意である。



先生は、檀家の方の1周忌のあと、建碑式に立ち会われた時に、心に浮かんだこととして、蒔田さくら子さんの「母が墓に生きて幸せなりしかと問いしが今は墓に問われる」という短歌を引かれ、遺族は1年の間、亡くなった母をを憶(おも)う心で日々を過ごしてきたが、墓を建立した時、今度は方向転換して、亡き母の方から「あなたは今幸せか」「阿弥陀仏に南無するあなたになってください」と呼びか



けられているように感じられるのではないかと。寂しいこと、悲しいことがあると、それを消してしまいたい、忘れてしまいたいという心が起こるが、それは楽になりたいという煩惱が起こっているのであって、「南無阿弥陀仏」の声はその私に苦しいこと、悲しいことがあってもそこにいのちの出発点がある、しっかりと現実を見つめ続けなさいと呼びかけてくださっている。



芭蕉終焉の碑と南御堂山門(当時)

また、芭蕉の「旅に病んで夢は枯野を かけめぐる」「憂きわれを 寂しがらせよ閑古鳥」という句を引かれ、芭蕉は「南無阿弥陀仏」に出遇っていたのではないかと。そして、むしろ孤独に徹することのできる喜びを感じていたのではないかと。終わりに、信心のひとは、無数の懐かしい聞法の朋友を恵まれると話された。(今回も、細川さんの聴聞報告をいただいて発行出来ました。感謝申し上げます。(本))